

乳幼児の生活と地域の自然をつなぐ絵本の開発と実践 ～あるお父さんとお母さんの試み～

中村知恵 (大阪府島本町住民) 佐々木宏展 (大阪府島本町住民)

はじめに

ひとびとが自然と接する「経験の消失」(自然離れ)が大幅に増加している(国立青少年教育振興機構 2010)。結果として、1)人々の健康や生活の質を害すること、2)自然に対する興味や関心、保全意識を大きく衰退させること、3)現状のままでは社会の自然離れが今後もより一層と進んでいく恐れがあることが指摘している(Soga 2016)。

子供が自然にかかわり、さまざまなことに気づいていく。それは、自然に関わる体験的な活動の最も基本的な意義である(無藤 2008)。かつて、ジル・ドゥルーズは差異と反復という著書において、現代人の問題は、反復ができないことであるということを主張している(ジル・ドゥルーズ 2007)。ここでいう反復とは、今日的に反復がもつ繰り返し練習するという意味ではなく、同じ場所においても絶えず新しい発見をすることを意味している。つまり、古くから気づきや発見の多様性とその重要性を述べていたのである。しかし、学校教育の授業になると、観点が極めて限定的になる場合がほとんどである。例えば、無藤(2008)は、小学生の生活科の授業でよく見られるアサガオの授業実践を取り上げ、あらかじめ見るべき点や特定の発見が実質的に取り上げられており、子どもの思考過程にそぐわない部分があることを問題点として指摘している。自然体験の基本的な意義と、授業によって生じる観点や発見の狭量性が齟齬をもたらしているのである。これらのことから、自然体験と授業実践の間で生じる齟齬の原因が何かということ明らかにしておくことが必要と考えている。

自然体験と授業実践の間で失われてしまうものの一つに対象のデザインする主体がもつ認識の多様性である。例えば、上記にあげたアサガオの事例のように、示唆されることがあらかじめ示されていることや、取り上げられるテーマが授業をデザインする主体の関心に即したものになっていることが挙げられる。これらの問題点は、子どもたちの多様な気づきを喪失してしまうという問題点がある。とくに乳幼児期の場合、実践者の狭量な意図が多様な発見の機会を損なう可能性がある。

そこで、今回は場のこだわりとして河川生態系という大きな枠組みにのみ意図を反映させ、後は気楽・観察・越境をキーワードに、親子で川遊びを実施した。また、試行として、フィールドの事前のモニタリングをもとにした多様な対象物をもとに絵本を作成し、実践の冒頭に読んでみることを行った。

方法 【実施要領】

○今日大切にしたいこと

子どもたちを川に連れてきたら、どんなことを見つけるのか、なるべく大人が制限しない状態で自由にぶらぶらさせてみたい。うちの子、「何を見てるんだろう?」「何に興味を示してるんだろう?」と観察するような気分でそばにいてほしい。子どもからでてくる問いかけや提案を受け止めるような感じで対応してみたい。

○終了後、おしゃべりしたいこと ※なくてもよい

- 普段どんな遊びをしているか?
- こどもと川に行ったことがあるか、頻度は?
- こどもはほかの人と川に行ったことがあるか、頻度は?
- 大人自身が小さい時川に行っていた経験はどうか?
- 川で、子供の様子を観察して気付いたこと?

○用意するもの

- 活動用：画用紙、クレヨン（もっていきます）
- 記録用：カメラ（iPhone 対応でいいかな。）
- 自作絵本（地元の自然で発見したものを描いたもの）
- アテンド用：養生テープ、マジック（もっていきます）
- アンケート用紙、えんぴつ、簡単な救急セット（もっていきます）
- お着替え

絵本のこだわり

絵本のこだわりは、こどもが関心を拾ったものに焦点を当てて、絵本を自作している。フィールドで絵本を読むという実践は多数あるが、どうしても決まったコンセプトのからフィールドを見てしまい、大人の意図が反映され過ぎてしまい、子どもの気づきを狭めてしまうことが多かった。ある子の発見が、ある子の発見につながるように、フィールドで発見したものを題材に絵本を作成している。この発想は、地域の特性を活かすことができるし、テーマを絞りすぎなくて良い（石とか、虫とかにするとこどもの体験をせばめる）。ただし、学問的なこととも関連づけ、生態系単位で場所を選ぶということに意図を反映させる。

あった！！プロジェクトとは??

あったプロジェクトとは、大人が準備する環境として生態系の単位で捉える自然体験活動である。その中でも、『あった』込められた願意とは、乳幼児の発見や気づきからスタートし、ともに発見し楽しむ大人がその姿を観察することからはじめようということである。発見や気づきの結果として、いつしか生物多様性やESDの考え方とつながればよいというゆるやかな意図がある。もうひとつの特徴は、絶えず変化する手づくりの絵本です。地元の自然を観察し、子どもが発見した対象を絵にして、変え続ける絵本を作ります。ある子の発見がある子の発見につながることを願って！！



やってみてわかったこと：ある幼児を観察した母の感想より



穴掘ったのは、Aくんが突然、あなほりたい！と言い出したんです。それにBくんの母がやるやるー！とノッてくれ、一緒に掘り出した。掘っていると、石を使ってほることを提案したり、掘ってるうちに、Aくんが川で見つけた長〜いタケを木みたいに立てたくなり、だったらもう少し深く掘る必要があるな、掘って石で周りを固めておく必要があるな、というのを経験しながら学習してました。立った！うれしい！っていう、達成感もありました。これが3歳児を見て思ったこと。1歳児は全員川にはまってたけど3歳児はふたりともはまってなかったことに2年の差を感じました。

足場の悪い河川敷でこけながらもしっかり歩いている姿に驚きました。砂や石を触ったり、水で遊んだりと手を使って遊ぶのが楽しいようです。あの日がきっかけかは分かりませんが、砂場遊びが好きになり、スコップやバケツを使って遊ぶようになりました。

ある父と母の会話

A：ママが1番で気にしてる、パパは遊んでるけど私は遊んでないな、みたいなのって私も含め多くのお母さんが感じてると思うのです。だけど、子どもにしたら、特別な場を設定するから遊びになるわけじゃないですよ。それを感じたから私も気が楽だったのかも。

B：それは本当にそう思います。商業的な場所に行くことが必ずしも遊びではなく、つぶさに子供の様子を観察すると、地元の川の方が圧倒的に広がり笑顔がある。何よりも、日常の土台（母との関わり）があるから安心があり、次への広がりチャレンジできると思うのです。遊び観をもっと、特別なこととしてではなく、日常的なものに！ですね！

おわりに

こうやって、きわめて自然なかたちで地元の自然に触れてみると、多くのことに気づくことができた。特筆すべきは、『遊び』の考え方が、僕らの世代の中で特別なものと思いつているということへの気づきである。特別な場所に連れて行かなければならないという思い込みがそこにはあるのかもしれない。特に父親は、週一回の関わりから特別な場所につれていかなければとか、とびきり面白い体験をさせてやりたいという思いから『特別』な場所につれていく傾向があるのかもしれない。

けれども、重要なことは、取り組んだ後、近場で気楽でその後も『母親が娘に対して前のところについてみようか？』と思える場所に、ある程度遊べる自然が準備されていることが大切だろうという話になった。なぜならば、日常を支えているのは『母』である場合が多いから。

謝辞

今回は、摂津市立第二中学校の美術部のメンバーに、絵本の作成を依頼した。幼児たちがひろい気づいたものをベースに、絵本を作成している。個人の体験と、絵本から発見の広がりを意図している。部員のみなさんありがとうございます。



展望

今後、乳幼児における自然との関わりは、地域や地元の小規模博物館や保育園等と連携しながら、緩やかに共に取組みを作っていくことが大切かなと考えている。まずは、保護者も保育園も学校教育も社会教育施設も日常でできないことから共有し、ともに当たり前のように支え合う場ができればと思っている。まだまだ書き足りないことがあります。保育園の先生、学校の先生、小規模博物館の学芸員の方々、お母さん、お父さん、地域の生き物好きのおじいちゃんおばあちゃん。一緒に集って出来ること考えませんか。気が向いたら連絡ください。

参考文献

- 無藤隆(2008) 理科大好き!の子どもを育てる-心理学・脳科学者からの提言. 北大路書房
- Soga M, Gaston KJ (2016) Extinction of experience: the loss of human-nature interactions. *Frontiers in Ecology and the Environment*. 14: 94-101.
- ジルドゥルーズ・財津理訳 (2007) 差異と反復〈上〉 (河出文庫)
- 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」(平成 22 年度調査)
- 井上美智子 (2009) 幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題
- 我が国における「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」実施計画
- 遠藤晃・櫛間和代・西田剛人・南正覚雅士 (2016) ユネスコスクール綾小学校における ESD 環境教育の実践 -アクティブ・ラーニングのための課題設定における自然体験の効果. 南九州大学人間発達研究 第 6 巻 Vol. 6 , 71-81

乳幼児の生活と地元の自然をつなぐ絵本の開発と実践
～あるおとんとあるおかんのチャレンジ～
中村知恵 佐々木宏展

キーワード

近場
観察
越境

背景 あるおとんとおかんの会話より

あるおとん

大人がねらいとして対象を決めようとしても、子どもの多様な発見や多様な気づきには気づかない場合が多いですね。誰かから教わることや伝えることを重視しすぎると、絵本に計画をねらう方向に意識が向いてしまいがち……

あるおかん

そうですね。『人と自然のかかわり』と、大きなイベントにして観察プログラムを作ってしまうと、どうしてもおかんの立場はかまえてしまうんですね……。そして、一回体験して終わり。できれば、親がその後も自分たちでいろいろ考える機会と継続性がほしいですね!! 近頃、気象もちょっとなんかあったら家帰るわ!! ぐらいの気象さ。やっぱり地元なんですね!!

提案 あった!! プロジェクト

あった!! プロジェクトとは??

あったプロジェクトとは、大人の願いとして、ねらいや意図を生きた生態系の現場で捉える自然体験活動である。その中でも、『あった』込められた願望とは、乳幼児の発見や気づきからスタートし、ともに発見し楽しみ大人がその姿を観察することからはじめようというところである。発見や気づきの結果として、いつしか生物多様性やESDの考え方とつながればよいというゆるやかな意図がある。もうひとつの特徴は、絶えずつづりの絵本です。地元の自然を観察し、子どもが発見した対象を絵にして、変化し続ける絵本を作ります。ある子の発見がある子の発見につながることを願って!!

こだわった場所・・・水無瀬川 (河川生態系)

やったこと

生態系を決める

絵本をつくる

近所でママババを集める

1時間ほど遊んで解散

方法 幼児の姿から (語りたことたくさん)

ある幼児の発見が、ある幼児の発見につながるように、絵本をフェールがで観ることを思いつきました。しかし、絵本には典型的な生き物やテーマが特定のものしかなく、地域のフィールドに合わせた絵本がありません。ということで、作れば良いということで、絵本を作成しました。





突然「穴を掘りたい」という要望から、大人が応答し、一緒に穴掘りをする。ほっといてく中で、石をつかって穴をほることを見つけた長い竹を木のように立ててみようとする。この竹を立てるために、深く掘ること・周りを石で固めることというこの必要性を感じ、やってみることを繰り返す。最後にはできた!! うれしい!! 声も。



石で積み上げられた水制の上を歩き、大きな竹を発見。発見を観察する1歳児。対象物の大きさに感動したのか、その要するをずっと目でおい、あとを追っていた。1歳児は、水の中にどんでん入っているが、3歳児は、水に入らずに枝をゲットしていた。

キーワード： 近場 ESD 生物多様性 乳幼児 観察 越境 自分事 生態学と保育